会派視察報告書

周南市議会　周南市民の会
小林雄二　　島津幸男　　尾﨑隆則
田中　昭　　友田秀明　　古谷幸男

視察項目―１

１　視察期日

令和５年　１月１７日

２　視察地

ほそごう学園（大阪府池田市）

３　視察事項

義務教育学校の設立および現状について

池田市について

人口　103,330 人、面積 22.14 ㎢。

人口は、周南市の３０年後の人口に近い。

面積は、本市の 30 分の１と非常にコンパクトな市である。

市内には、５つの中学校区があり、ほそごう学園以外の４校では施設分離型の小中連携教育を展開。

平成 27 年４月、施設一体型小中一貫校ほそごう学園（池田市立細郷小学校、細郷中学校）として開校。平成 30 年４月、府内３校目の義務教育学校　池田市立ほそごう学園となる。平成 29 年度よりコミュニティスクールとして学校運営協議会を設置し、地域に根ざし、地域とともに歩む学校運営を推進する基盤を整備し、９年間一貫した教育を行う義務教育学校の在り方を研究実践してきている。

児童生徒数４６５名（前期課程３０８名、後期課程１５７名）

一定の条件もと、市内どの校区からでも入学・転入学できる特認校制度を実施している。

＜教育目標＞

> 確かな学力と豊かな人権感覚の育成を仲間とともに
>
> 地域の特性を活かし、義務教育９年間を一貫した教育の中で、子どもたちに確かな学力と豊かな人権感覚を育て、仲間と協働し、誇りをもって、自らの進路を切り拓く力を育成する。

《重点教育目標》

自ら問いを持ち探求的、協働的に学ぶ子どもの育成

～地域と創るグローカルな人権総合学習の実践を通して～

⑴義務教育９か年一貫した教育の中で、人権教育を基盤とした取り組みを推進

⑵主体的で対話的な学びを追求する「授業づくり」

⑶子どもどうしのつながりを広め、深める集団づくり

⑷支援学級在籍児童生徒の育成にかかわる通常学級と支援学級の密接な連携

⑸「義務教育学校」の特色を活かした新しい教育課程への挑戦

～1stステージ（1～4年）・2ndステージ（5～7年）・3rdステージ（8・9年）を意識した教育実践～

⑹地域とともにある学園づくり

⑺コミュニティスクールや特認校制度の活用と推進

⑻健康教育の推進

⑼危機管理の徹底

今年度で5年目となる義務教育学校の説明を受けるとともに、施設見学を行った。

4　所感

2001年に附属池田小学校に発生した無差別殺傷事件。その影響か、ほそごう学園の正門前に到着した時、門塀はきちんと閉められ、守衛室が設置されているのを目にした。児童生徒の安全を守るための整備がしっかりなされていた。

校舎は、すべて新築のように感じたが、旧細河中学校校舎を全面改修し普通教室棟とし、特別教室棟・管理棟・サブアリーナ等が新たに増築されたものであった。ちょうど全国の小中学校にエアコンが設置され始める前に設計計画がなされ、完成し開校している。普通教室のみならず、理科室・音楽室・図書室などの特別教室にもエアコンが整備されていた。驚いたことに地域の避難所となる体育館にもエアコンを整備済みであった。管理棟の屋上に作られたというプールにも工夫がなされていた。なんと可動床プールだった。小学校1年から中学生まで使用するプールゆえ、非常に効率的なものだと感じた。

小中一貫校であるため、体育館だけでは不十分なためサブアリーナや体育やクラブ活動で使用する武道場も整備されていた。サブアリーナには、エアコンはないものの、前期課程（小学部）の児童が集会等を実施するのに十分な規模であった。

各教室は、全面の黒板が昇降型になっているなど本市と大差ないものの、特別教室の理科室などは、グループごとの机の高さが調節できるものや椅子を机にかけて収納し、床掃除がやりやすいタイプの椅子であった。学校図書館にパソコン教室を併設したメディアセンターやランチルーム、そして、小さなイベントのできる交流ホールも整備されていた。

素晴らしい教育環境の中で進められているほそごう学園での教育活動は、人権総合学習を柱として、コロナ禍にありながらも成果を上げつつある。

異学年の交流学習、特に集団宿泊学習では、5年生と8年生合同で実施されており、他の学校では類を見ないものであった。

もちろん課題もないわけではないであろうが、地域の協力を得て、学園ならでの特色を活かした教育活動が展開されていることが分かった。

本市においてもある程度の規模の学園が新設される際には、参考すべき事例がたくさんあった。これから迎える様々な教育問題にいち早く対応していける先進的な学校・学園が設置されることを期待したい。

（文責：田中）

視察項目―２

１　視察期日

　　令和５年　１月１８日

２　視察地

　　津ボートレース場

３　視察事項

津ボートレース事業について

津市の沿革

平成１８年１月１日 津市、久居市、河芸町、芸濃町、美里村、安濃町、香良州町、 志町、白山町、美杉村の１０市町村が合併し、新しい津市が誕生した。面積は７１１㎢、西は奈良県と境を接し、東は伊勢湾に至る三重県を横断する県下一の面積を有している。

津モーターボート競走事業の歴史

昭和２７年７月　競走場公認第１号として岩田川河口で開催

昭和４４年６月　岩田川河口から津市勝方に移転

平成　８年２月　対岸に大型映像装置、オッズ盤、確定盤を設置

平成１４年５月　新スタンド棟グランドオープン

平成２３年９月　対向発売所「津インクル」を開設

平成２９年４月　地方公営企業法の財務規定を適用し、「競艇事部」から「ボートレース事業部」に改編

令和２年度　過去最高売上額５６３億円を更新

令和４年　開設７０周年記念事業

ボートレース津公式キャラクター

「ツッキーファミリー」リニューアル

公式アンバサダーの登用

「チームラボ　学ぶ！未来の遊園地」の開催

施設環境の整備

令和４年度　競技棟建設、渡橋建設

令和５年度　競技棟供用開始、旧競技棟等解体、選手管理棟建設開始

令和６年度　選手管理棟供用開始、副審棟建設

4　所感

津競艇場も施設改善にかなり力を入れられていた。一般会計への繰り出しには、悩んでいるように感じられた。令和２年には、過去最高売上高を更新（５６３億円）し、学校などの公共施設の建設、道路整備、福祉・教育費などに収益は活かされていた。７０周年ということで地域に開かれたイベントが開催され、およそ１ヶ月の期間に16,208人の来場者を記録していた。また、Web 媒体を活用した広報活動やファンサービスが展開され新たなファンの獲得や売り上げの向上に努めていた。すでに津公式 YOUTUBE サイトからレース予想会等配信するなどコロナ禍にありながらも数多くの取り組みを行っていたことに驚いた。

（文責：尾﨑）

視察項目―３

1　視察期日

令和５年　１月１９日

2　視察地

四日市市役所

3　視察事項

四日市市工場夜景・四日市市の公共交通と

デマンドタクシー及び自主運行バスについて

初めに、四日市は三重県北部に位置し、天然の良港に恵まれ、江戸時代には東海道の宿場町として栄え、四の付く日に市が開かれていたことが市名の由来ともなっている。

戦後、昭和30年代には日本を代表する石油コンビナートが形成され、コンテナ埠頭の整備など港湾の近代化も進み、産業都市としての重要な役割を果たしてきた。この発展の過程で発生した公害問題も懸命な努力によって改善され、良好な環境を取り戻している。

市制施行は明治30年で平成29年には市制施行120周年を迎え、三重県中部圏の中核都市として存在し、人口309,338人、面積206.5㎢、（都市計画区域200.87㎢、市街化区域75.24㎢、市街化調整区域125.63㎢）世帯数142,974世帯、議員定数34人（令和4年4月1日現在）の市である。

(1) 四日市内の公共交通の現状

人口の90%が市街化区域に居住し、鉄道は（7路線、35駅）近畿名古屋線、ＪＲ関西本線、伊勢鉄道が南北の広域的な移動を支え、市の内陸部を四日市あすなろう鉄道内部線・八王子線、近鉄湯の山線、三岐鉄道三岐道が運行している。

バスは（25路線。但し高速バスを除く）三重交通バス、三岐鉄道バス、ＮＰＯ法人が

運行する「生活バス四日市」、市がバス事業者に運行委託している「自主運行バス」（3路線）、三重交通と市で共同で運行する「こにゅうどうくんライナー」（支線バス）が運行している。

デマンドタクシーの導入は、令和3年10月からで四日市タクシー協会などに運行委託。利用登録車に利用券を配布（500円券×4往復／月=年間96枚）。運行時間ＡＭ6時～ＰＭ11時00分。対象地区は市街化調整区域内で鉄道駅から800m、バス停から300m以内の区域を除く区域。運行区域は発地もしくは着地のいずれかが市内であること。対象者は対象区域内に住む70歳以上の者。申請方法は申告制。利用料金はタクシー料金から1枚当たり500円を割り引く、1乗車2枚まで利用可能、予約利用の場合には迎車料金100円が別途必要。予約方法は電話にて随時予約、駅前などで待機している車両も利用可。

四日市市自主運行バスについては、バス利用者の減少を背景にバス事業者が廃止を決めたバス路線について市民生活への影響を踏まえ、市が運行を三岐鉄道株式会社、三重交通株式会社に委託する形で自主運行バスとして3路線が存続している。

周南市における基本的な公共交通による移動手段は、ＪＲ山陽本線・岩徳線、山陽新幹線、防長交通路線バスと、タクシーによる移動方法が考えられる。

現状では、運転者不足やバスや鉄道利用者の減少に伴うバス事業者の路線廃止や赤字鉄道路線の見直しが現実の問題となっている。

少子高齢化に伴い、一人暮らし高齢者も増加し、高齢者個人の自家用車による移動が制約されてきている状況もあり、何らかの公共交通を確保していく必要が生じてきている。

四日市市の公共交通の特徴としては、市内中心部から概ね放射線状に鉄道網が形成され、沿線に市街地が形成され、鉄道網では利用しずらい市内郊外部の団地等をカバーするバス路線網が構成されている。

四日市市における公共交通に関する計画は（平成23年～令和4年）に向けて四日市市都市総合交通戦略が策定され、新四日市市都市総合交通戦略が策定される（令和5年～令和14年）予定となっているとの事であり、鉄道を基本に、バス網が連携する、基幹交通と支線交通の接続点の設置を提示し、コンパクト・プラス・ネットワーク志向を明確にしたとの事である。

⑵ 工場夜景について

四日市市の施策と課題

一般社団法人四日市観光協会と市当局との連携が良好で、民間IT出身専門家を活用した意欲的な取り組みが参考になる。

加えて、地元産業活性化と公害監視も見据えたマクロ的な視点からの観光取り組みが斬新といえる。ドローン活用といった施策も参考にすべきといえる。　>

周南市の問題点と対策

周南市は『天地人』で観光の宝庫といえる。ただ、先人の蓄積を活用できていないことが残念であり、「観光立市」をもっと標榜すべきである。

例えば、山からは太華山からの夜景とシーホースでの食事、金剛山とMs ダイニングでのディナー。海からは花火大会とサンセットクルーズ。町中からはホテルや新幹線口からの夜景。湯野温泉と棚田の四郎谷、道の駅ソレーネ巡り等が列挙可能といえる。徳山中央病院の先端医療を絡めた海外からのツアーも考えうる。

さらには、花火大会や消滅した祭りの復活、ポートタワーの建設、太華山開発等の着手ができないか?

町の元気は、新産業誘致とコンビナートの活性化に加えて市外からの力を如何に取り込むかにかかる。さらなる進化に向け、議会も行政と連携した対応が求められる。

5　資料

(1)四日市　コンビナート夜景マップ

（文責：島津）